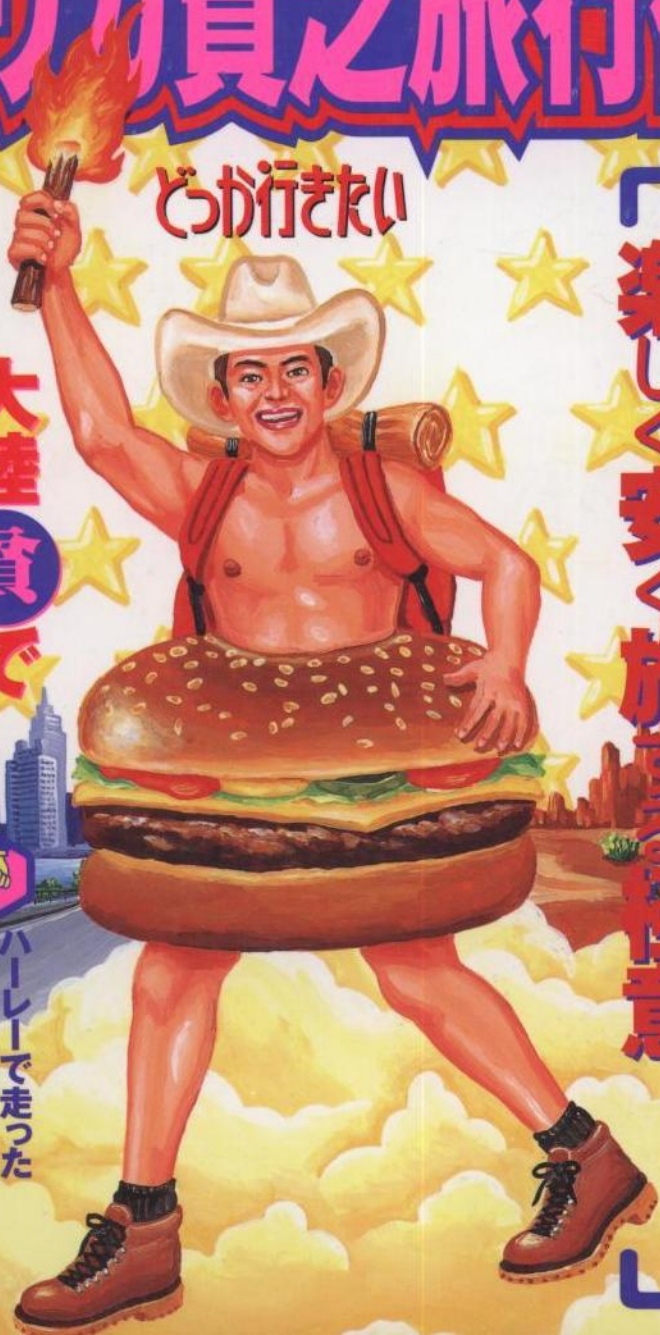


アメリカ貧乏旅行術

どが行きたい

「遠くまで身近なあの国を、
楽しく安く旅する極意」



自転車で
アメリカ横断

大陸貧で

楽大体験



ケツから血がでた
グレイハウンドの旅



手元に100ドル
レッチハイク



ハーレーで走った
1万8000キロ



4WDで
インディアン居住区へ

海外で暮らす
元氣な女たちが描く

世紀末の男と女

1998◎Vol.2

住んでみると、街は旅人には見せない顔をあらわにする。
海外に住むことを選んだ女たちがのぞく、オトコとオンナの生きさま。

北京の街角に巨大な自画像を描くアーティスト、バンコクで恋に落ちる男と女、
そしてサンフランシスコにいまも息づくヒッピーライフ。
ちよつと怪しくて、かわいらしくて、一生懸命生きる奴らの物語だ。

愛しき北京の赤貧アーティストたち②

文◎石川郁

北京の街を歩いていると、あちこちで、
一筆書きの奇妙な男の横顔に出くわす。最
初に目にしたのは王府井の裏通りだ。たろ
うか。黒のスプレーを吹きつけた輪郭だけ
の頭は、ユーモラスだがどこか不気味さも
漂い、不思議なインパクトがあった。やが
て至る所でこの同じ「頭」に出会うようにな
る。取り壊しつつある家の塀、崩れかか
った柱、公衆トイレの壁や陸橋の下……場
所によっては大きな「頭」が3つ、4つ

並んでいて、くすんだ灰色の街並みに妙に
溶け込んでいる。

スツと壁に近づき
スプレーでビュー。1秒の早技

北京を侃侃^{かんかん}喁喁^{うう}の議論に巻き込んでいる
この頭の仕掛け人こそ、張大力^{チンダリ}。これは彼
が数年来、集中して行っているコンセプト
アート作品（対話）である。ニューヨークや
ヨーロッパではこうしたグラフィティアー
トはもうお馴染みだが、北京では初登場。
流氓（ちんびら）グループのシンボルマー
クだとか、取り壊し家屋の新しい表示だと
か（北京では取り壊し予定家屋の壁に「拆」
という字が丸で囲んで書いてある、いろん

北京という都市に挑む
張大力のスプレー自画像

な説が飛び交った。大力はそんな街の風説を、わが意を得たりとひとりにやにやしながら聞いていたに違いない。

「これは俺と都市との対話、人との対話なんだ。誰かがこれに新しい絵や字を書き加えてもいいし、眉をしかめてせつせと消してくれてもいい。いずれにしろ、この頭像が人々を刺激し、いろんな印象や感覚を生じさせる」

そこに大力と人々との「対話」が成立し、アートと大衆の間にコミュニケーションが生まれる。大力の狙いはそこにある。

「これは俺の自画像なんだよ。ほら、この絶壁頭」。なるほど、そういうわれればよく似ている。

「いま、北京はほとんど現代化しつつあるけど、この都市の文化構造は急速な経済発展に追いついていない。俺たちのやっている前衛美術にいたっては、私生児みたいな存在。美術館は相変わらず旧態依然としていて、まともに扱う画廊もないから、こそこそ隠れて地下に潜らざるを得ない。文化に無関心な都市というのはいびつな存在だし、成熟した都市とはいえない。〈対話〉はそんな人と都市との関係を表している」大力が、夜な夜な北京の街に出没して

この〈対話〉を始めたのは95年の夏。その後96年までひたすら描き続けた、その数約3000！96年にはもうかなりちまたの話題になっていた。公共の場所にペイントするわけだから、見つければ当然取り締まられる。香港返還で文化活動に対する引き締めが強まった97年の夏は、彼も街での創作はお休みし、多少身の危険を感じたのか、一時は東北にこもっていた。

街の美観を損ねる不埒な行為、不道德だと批判する声も多いが、彼いわく、

「俺が描いているのはみんな廃墟とか、取り壊し寸前の場所や目立たない陸橋の下で、市民生活に悪影響や混乱は及ぼしてない。街に融化し、都市の変貌と共にいずれば消えていく、いわば都市の痕跡なんだ」

ある夜、一緒に歩いていて「創作」現場を目の当たりにした。急に私たちの側を離れた大力は、スツットと横丁の壁に近づいたかと思うとたちまちスプレーをビュ。あつという間に頭像ができあがった。その間わずか1秒。さすが手慣れている。15分位の間に、壊れかけた塀や電話ボックス、柱などに全部で15も描いたろうか。「見つけたこと？ ないよ。あわやつて

ときもあつたけど、熟練してるからね」

古 い伝統と新しい前衛。 気風が混在する北京が好き

張大力は1963年生れの35歳。黒竜江省のハルビンで生れ、子ども時代は陶器で有名な江蘇省の景德鎮で過ごした。大学入学と同時に北京へ出てきて、中央工芸美術学院の書籍装帧科で本格的に美術を勉強し始める。

「ハルビンも景德鎮も故郷という感じはなく、北京に来て初めて、ここが俺の住む場所という気がした。古い伝統文化と新しい前衛の気風が混在している北京が好きなんだ」

そういう彼は、いまの北京の都市計画にはすこぶる批判的だ。彼自身も住んでいる胡同(横丁)の伝統的な四合院建築が次々と取り壊され、ちゃんな現代建築がそれにとって代わる。道路拡張のために40年経っているみごとな並木がばっさばっさと切り倒される。

「むちゃくちゃだよ、まったく。いまの中国はなんでもありの世界。まあ、だからこそ俺たちにとっちゃ面白いんだけどね」
かくいう大力自身も、商売に手を染めた





① 大力が行った対話続編パフォーマンス<拆>。廃墟の壁に描いた頭像を響やかななでくり抜いた

② 取り壊され、廃墟となりつつある平層の後方では、現代高層ビル泛利大厦の建設が進む

③ 公衆トイレの壁に描かれた<対話>

④ 北京の横丁、胡同。取り壊される寸前の壁に描かれた3つの顔

⑤ イタリア時代の<対話>作品。北京とは違って、すでにいろいろな文字や記号が書き加えられている

⑥ <対話>のコンセプトによるインスタレーション
写真提供/張大力

ことがある。

一昨年、制作費を稼ぎ出すために友人と小さな広告会社をつくってせっせと看板づくりに励んでいたが、忙しくなって創作できなくなると嫌気がさし、その後はみな請負いに出したりしてついには潰れてしまった……。

イタリアでみつけた ギリギリのコミュニケーション

ちよつと脱線したが、大力は大学卒業後も北京に残り、水墨画家としての道を歩み始める。だが、1989年の天安門事件のあとイタリアへ渡ったことが、彼の芸術にとって大きな転機となる。〈対話〉を始めたのもじつはこのイタリア時代だ。

「見るもの聞くものすべてが新鮮で、数カ月は興奮状態だった。なんてったって美術の宝庫だからね。昔映画や絵のなかで見た城壁や由緒ある建物が目の前にある。博物館回りにも熱中し、名画の数々に感動した」

だが、そうしたハッピーな状態は長くは続かなかった。言葉ができなかった彼は、周囲の人とコミュニケーションすることができず、次第に孤独感を募らせていく。そ

れに加え、アーチストとしての焦燥感。こ

の土地で俺はいったい何者なんだ、なんでここにいるんだ？ この都市と俺とはなんの関係も結べない、と苦しんだ。そんななかでこの〈対話〉を始めたという。

「極端な方法だけど、俺にとってこれはこの国の人とのぎりぎりのコミュニケーションだったんだ。俺の描いた頭像に、イタリア人は罵り言葉や記号やいたずら書きを加えてくれた。それが俺にとって、言葉の通じないイタリア人との対話だった」

イタリアでの危機的状況が大力のアートを根底から変え、中国画とは完全に決別して、インスタレーションやパフォーマンスに手を染め始める。自己存在、自分と社会、個人と社会との関わりが大きなテーマとなり、社会と関わりをもたないアートは意味がないと思うようになった。

「試行錯誤の果てにわかったんだよ。芸術とは人間の研究だってね。単に絵や作品をつくることじゃない。人間の思考や行動、感覚すべてを把握しなければ意味がない」

友人のドキュメンタリー映像作家・呉文光^{ウーウェン}は、そんな大力の変貌に興味をもち、「四处流浪」でその軌跡を追っている（日本でも紹介済み）。

人間の危うさを描く作品 性病治療チラシがモチーフ

彼自身は、イタリアでの生活やイタリア人の夫人がいることをあまり公開しながら、ない（興味本位な扱いが多いので）。が、大力の中国人アーチストとして使命感を持ちながらもどこか突き抜けたコンテンポラリーな感覚、醒めたものの見方や世界のアート状況を見すえながらの現実的な判断は、やはり外国暮らしの経験によってつちかわれたものではないか？ よく感じることだが、外に出たことのある作家たちは、良し悪しは別としてどこかしらメンタリティや感覚が違う。よくいえば「開明」的で、中国を客観視する眼を備えている。イタリアに行かなかったら、大力の方向も変わることはなかっただろうか？

「いまとなつちやそれはわからないさ。中国にいても自然に覚醒したかもしれない。ただ、俺たちは中国美術教育の唯美主義や啓蒙主義^{けいもうぎ}のおかげで、芸術は美しく崇高なものではなければならないという観念にとっぷり浸かっていた。この弊害は大きいよ。アートにおける人間性の暗い面や悪の表現を認めない。暴力や破壊、猥褻^{わいせつ}さやいか

わし、邪悪な本質に目隠しをしてしまおう
唯美主義には反発を感じる」

大力は、一見穏やかでバランスがとれていそうに見えるが、じつはなかなかラジカルで「危険」なおいを秘めた男である。政治的なラジカルさではなく、もっと本質的な存在の危うさ……。

昨年、マルチスライドを使った美術展を企画したときも、町の性病治療のチラシ広告をモチーフに「悪心と快楽」という、良識派の神経を逆なでしそうな作品をものした。

「暴力や罪悪にはすごく関心があるし、魅かれる。自分で暴力をふるうことはなくても、社会や人間にもたらす影響には興味があるし、俺の芸術の原点でもある」

人間のもつ根本的な危うさをじつと見すえる大力の視線、秘めたラジカルスピリットは、中国のアーティストのなかでも独特のものだ。

一件2000033000元の罰金 並びにきれいに拭き取れ

最近、彼の〈対話〉はいろいろな新聞や雑誌で集中的に取り上げられ、これはアートか否か？ 表現として是非か？ と

いった視点で論議されている。ただし、まだ作者大力の名前は伏せたままだが。

市民からの反響も大きいらしく、「見ると1日中気分が悪い」というナーバスなサラリーマン。「どつか病気なんじゃない？ よほど暇なんだろう」という冷やかな態度の労働者。「厳罰に処すべき」という正義派もいる。対して支持派にはやはり若者が多く、「社会的角度から見れば問題かもしれないが、個人的には認める」というシンパあり、「北京の壁とよく調和しているわ。これも都市の文化」という進歩鑑賞派あり。なかには、「これは一種のポップアート。現代アートの特徴は創作の動機と目的意識の重視」と、なかなか的を得た指摘もある。報道は全体に客観的でそれほど悪意には満ちていない。中国も変わったなど実感する。

「大きな進歩だよ。ひとつの勝利さ。俺は新聞やメディアが、文化や芸術の角度からこの作品を論じてくれることを願っていた。中国のメディアは政府指導層の意向を直接反映しているからね。やり始めて3年、やつとまともに取り上げられるようになった。賛成にしろ反対にしろ、公開で自由に討論できることが重要なんだ。その意味で俺の

目的は達したわけだ。それは自由や民主の基礎の基礎だけど、いまの中国にとってそう簡単なことじゃない。でもいい方向に向かっていってるよ。そのうち名前も公開でき、数年もしたら美術館や画廊で発表できるようになると信じてる」

ところで公の見解としては、これはもちろん違法行為で、「都市環境衛生管理条例」に照らし合わせ一件2000033000元の罰金、並びにきれいに拭き取れということらしい。それを聞いた奥さん、

「えー?! 全部合わせるとうすこい罰金よ、どうする大力?」

彼はこれからも〈対話〉アートを続けていくという。街頭に描くという形に加え、この觀念のシンボルをインスタレーションや写真、陶器などのフォルムに発展させていくことに意欲を燃やしている。最近、廃虚の壁に描いた頭像をくり抜くというパフォーマンスも試みた。数人の出稼ぎ労働者を雇い、大力も一緒にノミやカンナで壁をうがつこと1時間。頭型にぶち抜かれた廃虚の穴の彼方に、豪華な高層ビルがよつきり姿を現した。そこには紛れもなく、日々移ろいゆく北京の「いま」が存在していた。